||||紹　介||||

<経済資料協議会・西部会>総会記念講演

資本主義の精神
——李晋徳『客商一覧醒迷』をめぐって——

大林洋五

今日は，経済学に関する珍しい資料について何か話をせよとのことでございますので，山口大学図書館に所蔵されております，李晋徳『客商一覧醒迷』という図書を題材にお話したいと存じます。

1．なぜ，中国は近代化（資本主義工業化）に立ち遅れたのか

中国史を研究するものが，誰しも疑問に思うのは，中国が，資本主義工業化の先頭とならなかったのはなぜだろう，なぜ近代化に立ち遅れて，半植民地化したのだろう，ということです。西ヨーロッパの近代化の前提とされる物理的諸条件についていえば，中国は十分にそれを満たしているように見えるからです。

労働力と潜在的市場としての人口は，十分すぎるほどです。

余剰の富の蓄積という点でも，桁違いに大きな物があります。

人と商品の往来・流通の自由も，統一帝国の強みでした。内国関税はありましたが，それは地方政府の財源のためで，商品流通そのものを阻害する目的ではなかったし，極端に高い関税をかければ，別のルートを取ることも可能でした。密貿易（走私といいます）も盛んでした。

西ヨーロッパの中世から近世への大きな変化（14世紀）と考えられている農民の人身の自由の獲得，つまり，農奴（serf）から小作人（tenant）への変化は，中国では，早ければ南北朝期（5－6世紀），最も遅く見る人でも明朝成立期（14世紀）には完成しています。農民が村を出る自由（それは飢え死にする自由かもしれませんが）つまり，地主との契約を破棄する自由のことです。

技術水準についても，各分野で凹凸があるのは当然ですが，レオナルド・ダ・ヴィンチ以前の西ヨーロッパの科学技術水準が，一般に同時代の中国のそれを上回っていたとは考えられません。

分業と協業についても，共同体間の分業，年齢や性別による分業は文明の発祥以来，世界中で行われており，専門の職人の存在も古いことでしょう。しかし，一つの工房内での，作業工程による分業は，西ヨーロッパ世界では，マニュファクチャー時代からです。例えば，壺作りにおいて，粘土で壺の形を作る人，絵を描く人，焼く人が，別々のエキスパートであるような，そして，それらを組織し，運営する人の存在です。中国では，かなり古くからこれが成立しています。では，なぜ中国は近代化しなかったのでしょうか。

資本主義化の直前だったのか

毛沢東はいっています。“中国封建社会の内部における商品経済の発展は，すでに資本主義の芽をはらんでおり，外国資本主義の影響がなかったとしても，中国はやはり緩慢ながら資本主義社会に発展していったであろう。”

毛沢東『中国革命と中国共産党』第1章第3節……1939
(『毛沢東選集』第2巻所収)

そうかもしれません。そうでないのかもしれません。歴史にifは無意味ですが。毛沢東は，中国亡国の危機に際して，中国停滞論，中国必敗論に対して，中国も近代化の可能性を持っていたことを強調したかったのだろうと思います。

しかし，大指導者が一言このようなことをいいますと，これを敷衍し，極端に強調する議論が横行します。アヘン戦争前夜の中国は，資本主義工業化の直前であった，10分前，いや5分前だったみたいな。

明朝成立期からアヘン戦争まで約500年の間，中国社会の基礎構造に大きな変化があったとは思えません。「緩慢な発展」としても，＜5分間＞が長すぎるようです。

西ヨーロッパの近世の始まりは，1500年前後からといえましょう。ルネッサンス，大航海時代，宗教改革などです。それらが何時始まって，何時終わったかといわれても困りますが，代表を一つづつあげます。

レオナルド・ダ・ヴィンチ逝去……1519
コロンブス，大西洋を横断，西インド諸島へ到着……1492
ルーテル，「95か条提題」ウィテンベルヒの教会の扉に掲示……1517

ちょうど15世紀から16世紀へ変わる頃が大変動の時代で，この頃から西ヨーロッパが世界史の本流になります。

このころの中国は，明朝の孝宗（弘治）から武宗（正徳）へ変わる頃です。陽明学の王守仁先生が活躍した頃です。

日本は，応仁の乱のあと，権威を全く失った将軍職を，東山殿・足利義政の二人の甥が，奪い合っていた時期です。

王守仁，寧王宸濠の乱を平定 ……1519
前将軍・足利義政逝去 ……1490

西洋史のもう一つのピークは，18世紀末です。アメリカの独立革命，フランス革命，イギリス産業革命です。

アメリカ独立宣言 ……1776
フランス，バスチーユ牢獄襲撃 ……1789
ジェームズ・ワット，蒸気機関の改良で，最初の特許 ……1769

これは，中国では，清朝の乾隆朝（1736 - 1795）の後半に当たります。

日本では，江戸幕府の，田沼時代から，松平定信へ変わる（1786 - 7）頃です。

これで見ると，西ヨーロッパが，世界史の本流として，近代化——資本主義工業化を推し進めてきたのは，つい最近の事で，中国の歴史からすると，同じ事が，中国で，とうの昔に起こっても不思議ないかのように思われます。

2．なぜ，西ヨーロッパが資本主義工業化の先駆けとなり得たのか

中国ばかりでなく，似たような疑問は，当時，別の文明の中心であったインド，中近東イスラム世界にも当てはまります。15世紀までは，この両者も，西ヨーロッパよりも先進地だったのです。インドは，いわゆるデリー諸王朝の末期で，まもなくバーブルがムガール帝国を建国する（1526）頃です。中近東世界では，オスマン・トルコが，コンスタンチノーブル（イスタンブール）を占領（1453）し，バルカン半島全域にその支配を拡大していた時期です。ついでながら，イタリア・ルネッサンスにおける，バルカンからイスラム支配を嫌って亡命してきた人々の役割も指摘

されています。

これで見ると，中国が<例外的に>資本主義工業化に立ち遅れたというよりは，西ヨーロッパが<例外的に>資本主義工業化を成し遂げたのだ，ともいえそうです。では，なぜ西ヨーロッパは資本主義化・工業化・近代化できたのでしょうか。

<人種論>でそれを説明しようとした人々もいます。最も極端な例がHitlerです。かれは，アリアン民族，とくにゲルマンの優秀性を近代化の主因としています。

Hitler『我が闘争』第14章……1927

ローマ帝国の時代にゲルマンが野蛮人だったのは，当時，寒冷不毛の土地に住んでいたからで，それが南下して所を得たから高い文明を築いたのだ，というわけです。これは我々から見ればずいぶん勝手な議論ですが，漠然とながら似た考えは，西ヨーロッパのかなりの人々が持っていたと考えられます。

宗教，イデオロギーでそれを説明しようとした人々もいます。

法律・制度，イデオロギーなどは，経済の発展に伴い，それに適合するように変わってきている，というのが唯物論の立場ですが，それを全面的に認めながらも，いったん成立した制度，イデオロギーが，経済発展を促進したり，発展を阻害することがある，ことを強調するのが，Max Weberの方法論的二元論です。Marxの方法論的一元論と対比されます。

Max Weberは，プロテスタンティズムの成立が，資本主義的商品経済の発展によるものであるとともに，逆にプロテスタンティズムの確立が，資本主義大発展に大きく貢献していることを強調しました。

Max Weber『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』……1904 - 5

当時（20世紀初頭）資本主義近代化を成し遂げていたのは，イギリス，オランダ，スウェーデン，ドイツの低地帯，スイスの西部・北部，アメリカ合衆国などプロテスタントの国々ばかりでした。唯一の例外は，フランスです。フランスはカトリック国です。しかし，フランスの近代化の始まりは，ユグノー（Huguenot）と呼ばれたプロテスタント（カルヴィン派）の手によるものだといわれております。

プロテスタントの倫理を，Max Weberは，Benjamin Franklinの勤労，節制，貯蓄を社会的義務とする信条を典型的なものと考えています。

Benjamin Franklin『自叙伝』(フランス語版　1791，英語版　1818)

Franklin 以外にも，似たような立場からの著作をあげておきます。

Samuel Smiles：Self-Help ……1859

この本は，イギリスで発行後数年間で25万部も売れ，聖書を別にすれば，史上最大のベストセラーといわれたそうです。また，統一直後のイタリアにおいて，4万部が売れ，当時の，識字率が極めて低かったイタリアで驚異的な売れ行きといわれています。しかし，日本では，1871（明治4）年に，

斯邁爾斯『西国立志編ー原名自助論』中村正直訳

として出版されると，たちまち100万部も売れたといわれています。日本の文盲率の低さとともに，新時代のイデオロギーに対する関心の高さを示すものでしょう。

ついでに，このような精神を示す小説を一つあげておきます。

Daniel Defoe：Robinson Crusoe『ロビンソン漂流記』 ……1719

Max Weber の考え方は，彼だけのものではなく，西ヨーロッパ人には，かなり一般的なものだったようです。Max Weber は，それを学問的に体系付けたというべきでしょう。ここに Nauman－森林太郎論争を紹介しておきます。

東大地質学教授として招かれ，日本に近代地質学を伝え，フォッサ・マグナ（大地溝帯）の発見，地質調査所の地形図の製作開始，古代象の化石（ナウマン象）の発見，など多くの業績を残してドイツへ帰国した Nauman 先生が，ドレスデンのクラブで，(1886.3.6）日本問題について講演しました。そこで，Nauman 先生は，日本が，近代化できるか，という問題に対して否定的な考えを述べました。“…日本人は，近代化のために大いに努力している，しかし，枝葉末節のことばかり学んでいて，もっとも肝心なこと，キリスト教を学ぼうとしていない。だから，これは成功する筈がない。”というものでした。この会に出席していた留学生，森林太郎軍医（鷗外）が，これに反論しました。“日本人は，たしかにキリスト教に関心を持つ者は多くはないが，それに代わるものとして，武士道というものがある。これこそ日

本近代化の精神である。…”云々。この時の発言を後日，文章として発表したのが鷗外全集に載っています。

森鷗外「日本に関する真相」1886.9.14（原載は“Allgemeine Zeitung”紙）
「日本に関する真相（再論）」1887.2.11（同上）

3．なぜ，日本は資本主義工業化に成功したのか

日本は，その後，Nauman先生の予想に反して近代化に成功しました。しかし，キリスト教化したとはいえません。そこで，なぜ日本は近代化できたのか，に関心が集まりました。20世紀半ばまでの時点で，非西ヨーロッパ世界で近代化していたのは，日本だけだったといえます。

Max Weberの時代には，まだ日本は近代化していませんでした。しかし，Hitlerの時代にはしていました。日本人はアリアンではありません。ですからHitlerは日本が近代化できた理由を説明しなくてはなりません。そこで，“…日本は，アリアンからの絶えざる影響があり…”と説明しています。日本人の我々にとって中国からの絶えざる影響ならともかく，アリアンからの絶えざる影響というのは理解に苦しむものですが。なお，Hitlerの戦前の日本語訳本（室伏高信訳・第一書房　1940刊）にはこの部分は削除されています。

Max Weberの論にかえっていえば，日本は近代化・資本主義工業化に成功しましたが，しかし，プロテスタンティズムは微弱なままです。そこで，プロテスタンティズムの代替品探しがされました。これらは方法論的にはナンセンスでしょう。Max Weberの論は正しい，しかるに日本は近代化したが，プロテスタンティズムは大した勢力はない，だからそれに代わるものがあるはずだ，というのは，本論の検証もない，easy - goingなやり方と思えますが。

明治以降の近代化の担い手たち，その代表的なイデオローグたちの間では，武士道をバックボーンと考えていたようです。森鷗外のほかにも，新渡戸稲造なども，そう言っています。わが山口大学経済学部の前身，山口高等商業学校の校歌にも“…商才士魂の標語によりて…”とあります。しかし，この説も，敗戦とともに消え去ったようです。

新渡戸稲造『武士道—日本の魂』（英文）……1899

1970年代から1980年代にかけて，フィリピン，タイ，インドネシア，インド等から，日本の近代化の精神を知りたいという人々が，日本へ来られました。そして，武士道はもちろん，神道，儒教，などいろいろなものをプロテスタンティズムの代替品として取り上げられました。独立以後の国作りが必ずしも順調でないことへのいらだちから，日本の近代化のイデオロギーを知りたいということだったようです。そこには，カトリック，上座部（小乗）仏教，イスラム教，ヒンドウー教などが，古い体制としっかり結び付いて，近代化を阻害していることへの批判（意識的にか，無意識のうちにか）があるようだと私は感じました。

1980年代末には，急速な成長を遂げ，先進国を今にもキャッチ・アップしそうだったNIEsの国々において，儒教，なかんずく朱子学が近代化のイデオロギーだとする説が，韓国などから流行しました。NIEsの諸国は，いずれも中国文化圏・漢字文化圏・儒教文化圏の周辺部分で，日本と共通しているからです。もっとも，韓国で朱子学説をとなえて有名になった方は，その後，日本の朱子学を研究して，それがあまりにも中国，韓国の朱子学と違うのに驚いて，自説を撤回されましたが。この時期の議論は，自国の発展を理論づける意図があったように思います。

金日坤『儒教文化圏の秩序と経済』名古屋大学経済学部 ……1984

では，日本の近代化が成功した条件は何だったのでしょうか。物質的条件は別として，ここではイデオロギーを考えますと，江戸時代の在野の思想家たちの主張が，きわめて合理的，近代的であることに気付きます。二人ほど例として紹介します。

石田梅巖（1685-1744）徳川吉宗のころ，丹波から京都で。石門心学
山片蟠桃（1748-1821）文化・文政期，大阪で。

ほかにも，新井白石（1657-1725），安藤昌益（1703-1762），佐藤信淵（1769-1850），二宮尊徳（1787-1856）などを挙げることもできましょう。

そんな堅苦しいものよりも，文学作品の方が，もっとわかりやすいかと思います。

井原西鶴『日本永代蔵』……貞享5（1688）

これは，ご承知のように元禄以前の致富成功，破産没落の話を集めたものです。

しかし，それ以前の成功談が，（神仏の加護による）僥倖によるものだったのに対して，勤勉，倹約（始末），創意工夫（才覚）によることを強調しております。他人に損害を与えて（だまして）儲けるのではなく，世間の役に立つことで金儲けをするということです。例えば「天狗は家な風車」では，鯨漁の村で，“…いつとても捨置く骨を，源内もらひ置きて，是をはたかせ，又油をとりけるに，思ひの外成徳より分限に成，すゑすゑの人のため大分の事なるを…”と，紹介しています。

鯨漁の村で，骨ばかりは何の役にも立たぬと捨てられ，蝿がたかる粗大ごみだったのを，もらってきて，それを砕かせ，絞ると大量の油が取れた。それによって，安い灯油を大量に供給し，何人かの労働者に賃金を得させ，絞り滓は農家が良い肥料と喜んでもらってゆく，社会に貢献しながら，自分も儲ける，まさに資本主義の精神そのものです。

『日本永代蔵』に，神仏の加護，僥倖，博打による成金の話が全くないというわけではありません。そういう話も混じっています。しかし，明らかに作者の主張は，勤勉，節倹，才覚です。この本は，原本なるものが30本以上も残っているそうです。こんなに沢山残っているのはほかにないということです。しかも，その30本が，みな構成，順序，表現など異同が多く，全く同じ物はない，といいます。当時の大々ベストセラーで，短期間に各地で再版，再々版が出版され，海賊版も多く出たからだと思われます。

『日本永代蔵』に示されたような町人精神，石門心学に示されたような思想があったからこそ，明治維新後，封建道徳に代わるべきものを求めていた士族をふくめた日本人に，『西国立志編』のようなものが，広く受け容れられたのだ，といえそうです。

4．なぜ，中国は資本主義工業化に立ち遅れたのか（再び）
—イデオロギーの面から—

ここで，最初の問題，中国は資本主義工業化になぜ立ち遅れたのか，という問題に戻りたいと思います。

物質的な条件としては，たとえば，農家，村，地域，帝国の単位で，自給性が高く，商品経済の部分が，絶対的な大きさはあっても，比率は小さかった，とか。人口が多く，小作人が多く，小作料が高く，小作人上層部から富農が出にくい，また地主も所有農地を一括経営し，労働者を雇用して商品作物を大量生産する（農業ブ

ルジョアジーになる）インセンティヴに乏しい，とか。しかし，ここではイデオロギー問題に限定して考えてみます。『史記』（著者・司馬遷はBC 93死），『漢書』（著者・班固はAD 92死）には，各々「貨殖列伝」というのがあります。金持ちになった人の伝記です。中国人流にいえば『日本永代蔵』は，江戸時代初期の「貨殖列伝」かも知れません。しかし，本家の「貨殖列伝」，『史記』『漢書』の中でも一番おもしろくありません。後の『後漢書』『三国志』以下には「貨殖列伝」の項目そのものがありません。正統的な歴史家や儒者は，金儲けを評価しなかったのです。

では，異端の思想家たちはどうだったのでしょうか。明朝末期ー清朝初期には，黄宗義（1610-1645），顧炎武（1613-1682），王夫之（1619-1692），など異端の儒者が沢山います。たとえば黄宗義の『明夷待訪録』など，題からして八卦（六十四卦）のひとつ<明夷>は君主が暗君で，これに仕える有徳の大臣は身が危ふい，という意味ですから，今上皇帝陛下に失礼この上ない話で，こんな言論が許される筈もない程のものですが，しかし，近代資本主義的な発想とは思えません。

長編小説，とくに，いわゆる四大悪書—『水滸伝』，『金瓶梅』，『西廂記』，『紅桜夢』の中には，商売のことがちらほらでてきます。また『聊斎志異』，『子不語』など，稗史小説の類の中に若干の商業，産業の機微に触れるような文章があります。

私はここで，商人への啓蒙を目的とした著作を紹介いたします。

5．明・李晋徳『客商一覧醒迷』

李晋徳『客商一覧醒迷』……明・崇禎8（1635）

この本は，長州藩の支藩，徳山毛利家の蔵書——棲息堂文庫に伝えられてきたものです。棲息堂文庫の善本は，宮内庁図書寮に収められましたが，その残りの「不善本」のなかにこの本はあったのです。

この本は，古い目録に載っていながら，長い間，行方不明になっていました。それを，当時の山口大学文理学部の先生方が再発見されたのです。再発見されてわかったのですが，行方不明になっていたのも道理，この本は，明の黄汴の『天下水陸路程』という本との二つの異なった本の合本となっていたのです。合本といえば，普通は，二冊を一冊に綴じ併せるものですが，これは，各ページを上下四・六くらいに仕切って，上の段に『客商一覧醒迷』を，下の段に『天下水陸路程』を印刷してあります。上下の内容に関係はありません。御覧の通り，袖珍版の汚い本です。開

けてみないと，『天下水陸路程』のほかに，『客商一覧醒迷』もあるとは気付かなかったのも無理ないことです。この本は，その後，棲息堂の残りの本と共に，1967年に当時の山口大学文理学部図書館に寄贈されました。現在は，山口大学図書館の貴重書の部屋に保管されています。ですから，これはもともと経済学部の蔵書ではなく，人文学部のものといえます。

黄汴の『天下水陸路程』は，この本の発行より65年前（隆慶4，1570）に発行された同著者の『一統路程図記』と内容は全く同じです。

『天下水陸路程』は，商品を各地に運んで売りさばき，あるいは仕入れて運ぶ<客商>のためのガイドブックです。各都市を結ぶ道路・水路ごとに，その駅（宿場），税関，宿賃，船や馬のレンタル料，物産，人情などを詳細に解説しています。極めて実用的な本といえます。

『客商一覧醒迷』は，商業道徳，商人の心得，取引の機微について，なかなか鋭い指摘をしています。詐欺や，役人の権威を利用しての金儲けを排し，長期的な展望をもった商売を勧め，商売が社会的に有意義であり，誇るべきことだと主張しています。

商売の，各段階，各分野での心得，例えば，“やたらとご馳走したり，接待したがる取引相手は警戒せよ”“偉そうにしているのに使用人の服装が悪い人は危険だ”“安すぎる商品は仕入れるな（欠陥商品か，出処が怪しい）”“役人の権力を笠に着て金儲けをするものは，役人の権力で財を失うことがあるものと心得よ”などは，今でも教訓にすべきかも知れません。

この本にも，現在の我々から見ると，どうしようもない古い部分，例えば，吉日・凶日（忌日）などの話も入ってはいます。

この本，天下の孤本，と聞いておりましたが，1992年末でしたか，中国の新刊図書目録に，この本の名前を見つけました。乾隆皇帝の『四庫全書』を作るための図書狩りの際にも出てこなかったこの本が，中国はさすがにどこかにあったのだ，と感心して早速注文しました。届いたのを開けてみると，「前言」に“…（この本は）国内では失われて久しい珍貴な図書である。孤本が日本山口大学図書館に所蔵されている。近年来，明代の交通と経済を研究するために，私は，この類の文献と図書を探し求めていた。1989年10月，私は日本での学術交流活動に参加した時，茨城大学の鶴間和幸教授にこの本のコピーをお願いした。1990年10月，鶴間和幸教授らの一行がわが国を訪問された際，この本のコピーを私に贈られた。学界の同好はこのことを知ると，何人かの友人が借りたいと手紙をよこし，もっと多くの友人は私に

この本を整理・出版するよう勧めてくれた。現在読者の前にあるこれは，このコピーを整理したものである。…”何のことはない。結局この本のことでした。

楊正泰・校注『天下水陸路程，天下路程図引，客商一覧醒迷』
山西人民出版社 ……1992
（なお，２番目の「天下路程図引」は，「天下水陸路程」と似た別の貴重書を楊氏が併せて掲載したもの）

しかし，お陰でこの本が大変読みやすくなりました。私にしても，原本のままでは，貴重書で恐れ多いというだけではなく，紙質は悪い，印刷はかすれている，大変に読みにくい本を始めから終わりまで読み通すことはしなかったでしょう。『客商一覧醒迷』の発行は，明朝の末です。９年後には明朝は崩壊します。著者の李晋徳は，福建の商人というほか，何もわかっていません。士人（役人やその候補者）でないため，伝記などとは無縁だったようです。

中国でも，資本主義の精神とでもいうべき主張をもった人が決していなかったわけではない。しかし，『日本永代蔵』は大々ベストセラーとなっているが，中国の『客商一覧醒迷』は，注目もされず，ほとんど失われかけた珍貴な孤本だという違いがあります。両者の発行年，53年の差です。

＜資本主義の精神＞が決してきれいごとばかりでない，詐欺・恐喝に近いやり方で金儲けをした奴も，私たちは知っていますし，正直ゆえに没落した人もたくさん知っています。しかし，それだけでは，資本主義が数世紀も存続し，人類未曾有の大発展を遂げている筈もありません。そこには，自分の金儲けが，社会への貢献と一致しているという自負があったはずです。蓄財そのものを不潔なものと考えた古代・中世の考え方との大きな違いです。

今日は，中国において積極的に＜資本主義の精神＞を主張した著作の一つが，たまたま山口大学にありますので，これを紹介致しました。

＜質疑＞

Q：この本が，上下二段に区切って別の内容の本を印刷してあるとのことですが，なぜ，そんな厄介なことをしたのでしょう。

A：答えは推察するしかありませんが，下の段の『水陸路程』は，現代の時刻表，

『地球の歩き方』みたいな，案内書で，旅行の必需品だったと思われます。客商は，これを持たずに旅行はできなかったろうと思います。そこで，これを読むときに，上の段の心得，教訓も少しでも読んでほしいという著者の願いではなかろうか，と思います。

(2000.10.27　山口大学経済学部にて)